派遣先所属　宮城県文化財保護課　　氏名　伴瀬宗一
派遣期間　　平成 24 年 10 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

1　派遣業務の内容、現況

派遣先の宮城県文化財保護課では主に高台移転等に伴う発掘調査業務を行っています。これは震災により住宅が倒壊しているため、その再建のための埋蔵文化財の発掘調査です。そして震災から 2 年半が過ぎ、仮設住宅の暮らしも長期化してきました。新しい住宅に住むという目標が、ある意味モチベーションになっている部分があります。ですから、事前の発掘調査も速やかに行う必要があります。

現在やっている調査は、気仙沼市の台の下貝塚、台の下館跡という遺跡です。全面が遺跡というわけではありませんが､計画範囲の面積は 4.5ha という広大な面積です。そこに 58 戸の住宅が建つ予定です。調査の終わった場所から逐次ひきわたしていまして、高台移転工事もすでに平行して始まっています。一部に埋蔵文化財が復興の足かせになっているような伝わり方もしていますが、復興という共通の目標のために工事の進捗に極力影響を与えないように工夫してやっています。

一緒にやっているメンバーは、気仙沼市の専門職員、宮城県の専門職員、宮崎県、佐賀県、広島県、奈良県からの派遣の皆さん、そして、地元の作業員の皆さん、総勢では 70 名近い人員でやっています。

遺物の出土状況

気仙沼の現場作業員さんのおおくは被災されています。どのように知るかといえば、仮設住まいであるとお聞きして、被災されたんだなぁと想像するだけです。ただ、普段の会話の中では被災の内容を知る機会はほとんどありません。この手の話題には最も気を使います。気を遣ってはいますが、作業員さんとのコミュニケーションは概ねうまくいっていると思います。

気仙沼市に来たのは 7 月末です。振り返ると早三か月が過ぎようとしています。それまでは、多賀城市、石巻市、女川町と転戦してきました。石巻の北端の旧河北町というところでも、高台移転関連の試掘調査をやりました。浪田遺跡という遺跡がある

丘陵の上からは、東方向一面が海です。そこからは、海からの日の出が望めます。高台移転の工事が終了し、住宅が建った暁には、きっと美しく日の出がみられると思います。

最終的な受益者は宮城県民の方々だということを強く心にとめて、県民の皆さんの生活基盤の回復のため引き続き努力したいと思います。

発掘調査作業状況

２　復旧･復興状況や被災地での見聞・感想

気仙沼はここ数日、すっかり冷え込んできました。沿岸部ではそれほど雪は降りませんし、降ってもすぐに融けるとのことですが、それでもやませと呼ばれる冷たい風が海から吹き付けます。身体あっての復興支援だと思っていますので、健康には気を付けていきたいと思います。

遺跡の遠景

報道等でも話題になりました津波被害の象徴ともいえる第 18 共徳丸は、解体が完了しました。共徳丸が姿を消したとしても被災された皆さんの心の中にはいつまでも残るのだと思います。どこまで復旧・復興に寄与しているのか目に見えていないことがありますが、私も共徳丸を心にとめてなお一層努めていきたいと思います。

派遣先所属　　宮城県教育庁文化財保護課　　氏名　岡本　健一
派遣期間　　平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

1　派遣業務の内容、現況

あの未曾有の大災害から 2 年半以上経過しました。東北の沿岸部は津波で甚大な被害を受け、今も多くの方々が仮設住宅で居住せざるを得ない状況が続いています。生活の再建のためにも、津波の心配がない高台への町機能の移転が急務となっています。

日本列島のいたるところで、過去から連綿と刻まれた人間の生活の跡がみられます。被災地もその例外ではなく、数多くの遺跡が残されています。高台移転のための開発により、やむを得ず壊れてしまう遺跡は、発掘調査を実施して記録保存をしていく必要があります。それは決して復興の妨げとなるのではなく、これからの復興に欠かせない町のアイデンティティーを築き上げる作業だと考えています。

今回、私は宮城県教育委員会に派遣され、南三陸町の発掘調査を担当することになりました。南三陸町は宮城県の中でも、特に甚大な被害を受けたところで、町の中心地だった志津川地区は、町役場もろとも津波に流され、多くの方が犠牲になったところです。高台移転の開発予定地のうち、1 か所の尾根上には新井田館跡という遺跡が所在していることがわかっていたので、工事着手前に発掘調査を実施することになり、関係部署と調整が進められました。発掘調査は 4 月から始まり、年度中に終了するよう急ピッチで行われています。

新井田館跡発掘調査作業風景

発掘調査現場の様子（堀の状況）

新井田館跡は、15 世紀から 16 世紀にかけて地元の有力者によって築かれた山城です。文書等の記録は残っていないので、誰の居城なのかははっきりしません。ただし、常時、武将が起居していなかったようで、生活に伴う遺物はほとんど出土していません。おそらくは、非常時のための防御用の城だったのでしょう。

大きな平場が 2 か所あり、その平場からは多数の柱穴が検出され、かなり規模の大

きな建物があったことがわかります。それら平場の周りには堀が、さらにその外側には土塁がめぐらされ、城は堅固に守られていたようです。これまであまり知られていなかった、宮城県沿岸部の山城のようすが明らかになり、大きな成果を上げつつあります。

今年度、宮城県教育委員会には、北は秋田県から南は宮崎県まで、24 名の職員が派遣され、県内の復興関連事業の発掘調査現場に配置されています。私の担当する南三陸町の発掘現場では、私の他に 4 名の派遣職員と 1 名の宮城県職員がいます。それぞれ新潟県、山梨県、福井県、徳島県から派遣されている職員です。また、南三陸町では、長野県原村、秋田県から派遣された職員が発掘調査に携わっています。各職員が地元で行っている調査方法などの情報を交換しながら、よりよい方法、より効率的な方法を追求しつつ、調査を進めています。

2 復旧・復興状況や被災地での見聞・感想

現在、私の担当する発掘調査現場には、約 60 名の地元の方々が作業員として登録しています。その中の半分以上の方々は、今でもなお仮設住宅にお住いになっていると聞いています。

作業中や休憩時間の時に、あえて震災の話をこちらから聞くことは避けてはいますが、話の端々で震災の時の苦労話が出てきます。みなさん、それぞれつらい震災体験をもち、今でも不自由な生活を強いられています。しかし日頃の彼らの明るく活動的な姿は、そんなことをまったく感じさせません。私がこのような立場だとしたら、果たしてこれほどまでに元気にふるまえるか、自信はありません。彼らの強靭な精神力には頭が下がる思いです。

南三陸町志津川地区の現況（8 月ごろ）

南三陸町の復興は、これからという状況です。あの有名な町役場の防災対策庁舎は、年内には解体されようとしています。賛否があるようですが、いずれにしても町の人々にとって、それが復興促進の足掛かりとなり、一刻も早く、普通の生活に戻れることを願ってやみません。また、私も微力ながら少しでもお役に立てればと思いながら、今日も発掘調査現場に立っています。